

国際企業人の視点から見た在外教育施設の問題

ペルー三菱商事会社社長 田中 康晴

先ず、本稿の本題である国際企業人の視点から見た在外教育施設（日本人学校・補習校）の問題に入る前に、日本の社会や企業が必要としている人材に付いて、私見を述べさせて戴きます。

在外教育の目的の一つとして「日本人としてのアイデンティティの形成・確立」を挙げる論考を目にすることが多々あります。然し、私は、日本人としてのアイデンティティという言葉は非常に厄介な問題を内包していると思っています。抑々、日本人としてのアイデンティティとは多分に主観性を帯びた言葉であり、その解釈は人によって異なります。更に重要なことは、アイデンティティとは他者との関係に於いて成立するものであることから可変であるということです。即ち、世界の変化に伴い、日本人としてのアイデンティティも変化し得る、或いは変化する必要があると思っています。近代史に於いて、日本人は二度に亘ってアイデンティティに大きな修正を加えて来ました。一度目は明治維新時、二度目は第二次世界大戦終戦時です。前者に関しては日本の近代化、後者に関しては戦後復興及びその後の高度経済成長を果たす為に必要な修正でした。

そして今、日本はバブル崩壊後の失われた30年を経て社会的にも経済的にも行き詰った状態に陥っています。その様な状態から脱却する為にも、今一度、世界との関係に於ける日本の立ち位置を見直した上で、アイデンティティに大きな修正を加える必要がある時期に差し掛かっているのではないかと感じています。そして、日本が大きく変わる必要がある時代には、個人的解釈の余地が大きく、且つ、陳腐化が進んでいる可能性がある日本人としてのアイデンティティを押し付ける教育は決して行ってはならないと思っています。寧ろ、日本人としてのアイデンティティを正しい方向に修正し得る人材を

輩出する教育が必要だと思っています。誤解のない様に、私は、日本人としてのアイデンティティの全てを否定している訳ではありません。主観が混じりますが、個人的には言語・文化・伝統に類するものは日本人としての核心的なアイデンティティとして時代を超えて育んでいくべきと考えています。

では、日本人としてのアイデンティティを正しい方向に修正し得る人材には如何なる資質・能力が求められるのでしょうか。飽くまでも個人的な見解ですが、世界の国々乃至は人々が持つ多様な価値観や考え方を理解・受容した上で、世界との関係に於ける日本乃至は日本人としての今後の在り方・価値観等に付いて自ら高い問題意識を以って考え、その考えを論理的に説明し周囲の納得・共感を醸成する資質・能力だと思います。即ち、「異なる価値観や考え方に対する理解力と受容力」「問題意識力と自律的思考力」「論理的説明能力と意思伝達能力」です。

実は、今日の日本企業もこれらの資質・能力を持つ人材を必要としています。現在、日本企業を取り巻く経営環境は、VUCA (Volatility = 変動性、Uncertainty = 不確実性、Complexity = 複雑性、Ambiguity = 曖昧性) と称され、不確実性が高く将来予測が困難であり、且つ、変化のスピードが非常に速い状況となっています。この様な環境に対応する為に、ダイバーシティ&インクルージョン (Diversity & Inclusion, D&I) の重要性が注目されています。人材の多様性を認識・受容した上で個々の力を活かしていくという概念です。世界的に見て日本企業の人材は均質的或いは画一的な傾向にあると言え、嘗ては日本企業にとっての強みの一つとも捉えられていました。然しながら、VUCAの時代に於いては、人材が均質的・画一的な企業は、不確実性が高く将来予測が困

難な環境に対応出来ず、変化のスピードに取り残される虞があることが、ダイバーシティ&インクルージョンの重要性が注目されている背景です。尚、ダイバーシティ&インクルージョンに於ける多様性とは、国籍・人種・性別・言語といった表層的な多様性だけではなく、価値観・考え方・スキル・職歴といった深層的な多様性を含みます。ダイバーシティ&インクルージョンを企業に根差す為には、先述した「異なる価値観や考え方に対する理解力と受容力」「問題意識力と自律的思考力」「論理的説明能力と意思伝達能力」を持つ人材が必要であることは、論を俟たないと思います。

ここからは本稿の本題である在外教育施設の問題に入らせて戴きます。昨今に於いては、海外子女の教育に当たり、在外教育施設ではなくインターナショナル・スクール（以下、インター校）或いは現地校を選択する保護者が増加していることはご存知の通りです。上述の日本の社会や企業が必要とする人材を踏まえるに、「異なる価値観や考え方に対する理解力と受容力」に関連するダイバーシティと、「問題意識力と自律的思考力」「論理的説明能力と意思伝達能力」に関連するアクティブラーニングの両面に於いて在外教育施設に先んじているインター校・現地校を選択する保護者の増加は必然的な流れと感じます。人材難・財政難・設備問題等の在外教育施設が抱える固有の問題、帰国子女に対する門戸の拡がり、オンライン含めた学習機会の多様化等もあるかとは思いますが、突き詰めれば、保護者がインター校・現地校の教育の質・環境をより高く評価していると捉えるべきだと思います。

では、在外教育施設の問題の所在はどこにあるのでしょうか。勿論、私は教育の専門家ではありません。従って、的外れな指摘かも知れませんが、在外教育施設の本質的な問題は在外教育施設そのものにあるのではなく、日本の社会と教育の在り方にあると感じています。

先ず、日本の社会に於いて触れたいと思います。イギリスの The Varkey Foundation が定期的に公表している GTSI (Global Teacher Status Index) をご存知の方は多いと思います。世界主要 35 カ国に於ける教職に対する尊敬度合い及び教員の社会的地位を指数化したものですが、日本の GTSI は調査対象 35 カ国中 18 位と残念な

結果となっています。教職に限らず社会からの尊敬を得られない職業には優秀人材の流入に制約が生じます。

更に、The Varkey Foundation の調査に於いては、労働時間の長さや賃金の低さ等、日本の教員の待遇面に於ける問題も指摘されており、その結果、子供が教職に就くことに肯定的な保護者は 11% (調査対象 35 カ国中 33 位) と非常に低い水準となっています。The Varkey Foundation の調査結果を裏付ける様に、日本の教員採用試験の競争倍率は年々低下しており、2022 年には 3.1 倍と過去最低の競争倍率を記録したそうです。民間企業に於いては、採用母集団の減少は人材の質の低下・量の不足、延いては企業の競争力の低下に繋がります。それと同様のことが、教育の現場に於いても生じているのではないかと愚推します (誤解のない様に、飽くまでも全体傾向の話であり教員個人個人の質の話をしていません)。如何に優れた教育システムを構築しても、実際にシステムを運用するのは教員です。仮に教員の質の低下・量の不足が生じているとすれば、質の高い教育は期待出来ません。そのことが、海外子女の保護者がインター校・現地校を選択する一因となっている可能性があると思います。日本の社会に於いては、伝統的に教職は尊敬の対象であった筈です。日本人としてのアイデンティティは可変であるということは冒頭に申し上げた通りですが、こと教職に対する尊敬という点に於いては、誤った方向に変質していると思います。社会の教職に対する尊敬を取り戻し、教員の社会的地位の向上を図る為にも、日本人としてのアイデンティティを正しい方向に修正し得る人材を輩出する教育が必要であると考えます。尚、ここで私がいう教育とは、学校教育のみならず社会教育・家庭教育を含みます。

次に日本の教育の在り方に於いて触れたいと思います。近年、日本に於いても生徒の主体性をより重んじたアクティブラーニングの重要性・必要性が議論されていると認識しており、この点、非常に肯定的に捉えています。一方で、アクティブラーニングの分野に於いては欧米諸国が先行しており、日本は後発の立場にあると理解しています。民間企業に於いては、後発企業が先発企業に対して優位性を確保する為には、先発企業の製品・サービスに新たな付加価値を付けて市場・顧客に訴求する必要があります。これを教育に置き換えると、アクティブ

ラーニングの分野に於いては、日本は先行諸国に学びつつも、日本の教育の長所や強みを加えることによって、更に質の高いものに進化させていく必要があるということになるかと思えます。この点、日本人は、核心的なアイデンティティは守りつつも、海外から制度・知識・技術等を柔軟に取り入れ、それらを独自の形で発展・進化させる能力に非常に長けていると思えます。繰り返しになりますが、私は教育の専門家ではありませんので、日本の教育界に於けるアクティブラーニング含めた教育の在り方に関する議論や取り組みに付いて、十分な理解・知識を持ち合わせていません。ただ、日本の教育界に於ける議論や取り組みが、世界に誇り得る教育の質に繋がるのであれば、自ずと海外子女の保護者の在外教育施設

に対する評価の見直しに繋がると思えます。

最後になりますが、私は、職業柄、様々な国々の文化・社会・政治・経済等に触れる中で、国力の源泉は教育にあるとの考えに至っています。その様な考えからも、教育関係者の方々に対しては高い敬意を持つのみならず、大きな期待を抱いています。又、約40年前に当時としては非常に先進的な教育を日本人学校から施して戴いた自身の経験からも、在外教育施設には日本の社会や企業が必要とする人材を輩出する潜在力があるとも思っています。今回の寄稿に当っては、複数の教育関係者及び海外子女・帰国子女の保護者の方々より貴重なお話を伺う機会を持たせて戴きました。ご協力戴いたの方々にはこの場を借りて心からお礼申し上げます。

奇跡そして必然の出会い

～上海日本人学校浦東校での勤務以外のこと～

元上海日本人学校浦東校（新潟県立高田特別支援学校） 松井 明

1 はじめに

2019年4月から2022年3月までの3年間、私は上海日本人学校浦東校に勤務していました。妻と息子を帯同し、3人家族での生活でした。1年目(2019年度)は、12月まで通常的生活を送っていましたが、冬休みに入る前に上海から約700km離れている武漢で感染症が流行っているという情報が入ってきました。年が明け、1月後半の春節から各地で感染者が出始め、学校は休校になりました。2年目(2020年度)は中国のゼロコロナ政策が始まり、学校はしばらくオンライン授業で対応していましたが、6月より登校が再開されました。上海市外には容易に出ることができないものの市内では日常の生活を送ることができていました。3年目(2021年度)も引き続きゼロコロナ政策継続で制限下での外出が可能でした。3年目が終わり、帰国後に上海では長期の大規模ロックダウンが起きました。

2 上海での出会いからの広がりや深まり

上海での3年間の生活の中で、職場での出会い以外にもたくさんの出会いがありました。その中でも、特に印象に残るもの、私の考え方に大きく影響したものを2つ紹介します。

(1) 30年ぶりの奇跡の再会

上海には3万人の日本人が住んでおり、47すべての都道府県人会があるとされています。私は、新潟県人会、福井県人会、青森県人会の3つに所属してしま

た。新潟県人会は私が新潟県からの派遣だから当然の選択です。福井県人会は、私の出身大学が福井だったからです。学生時代に4年間住んでいた場所ですから土地勘もあったり、私の友達を知っている人がいたり、福井県人会でも楽しく会話ができました。青森県人会は、私の弟が青森にいるからという理由で入会したのですが、当時の教頭先生が青森県出身で私を誘ったことが入会の大きなきっかけです。

青森県人会に参加していた時のことです。私は青森県には一度しか行ったことがなく、青森県で知っているのは弟だけ。当然、県人会に参加しても他の参加者との共通の話題はありません。一人でビールを飲んでいると、私と同じく一人でビールを飲んでいる男性がいました。私はその男性に話しかけました。すると男性は私に名刺をくれました。名前は于平(ユーピン)さん、中国人です。そして流暢な日本語を話しました。あまりに上手な日本語なので、どこで日本語を勉強したのかを聞くと、日本の大学に留学していたとのことでした。以下、于さんと私のやり取りです。

松井：「どこの大学に留学していたのですか？」

于さん：「福井大学に留学していました。」

松井：「えっ、私も福井大学出身ですよ！」「何学部にいたのですか？」

于さん：「教育学部です。」

松井：「えっ、私も教育学部ですよ！」「専攻は何ですか？」

于さん：「技術で
す。」

松井：「えっ、私も
技術ですよ！」
「いつ大学にい
たのですか？」



于さんと私が福井大学教育学部技術専攻にいた期間も一致しました。その瞬間、「あ〜っ、いたいた！」とお互い同級生であることがわかりました。私が于さんの顔を見てすぐに思い出せなかったのは、于さんは大学時代、授業が終わるとすぐに隣の市の留学生寮に帰宅していたので、私たち日本人学生との関わりが少なかったからです。しかし、お互いの存在は分かっていた。

于さんは、大学を卒業後、岐阜大学大学院で博士学位を取得。その後、日本のソフトウェア会社に就職してから上海へ戻り、上海でソフトウェアの会社を起業しました。現在、その会社は社員に仕事を任せておけばよいほど大成功しています。于さんは当時、日本の国費留学生として日本から金銭的な援助を受け、奨学金をもらいながら勉強に励んでいたそうです。そして、自分が成功したのは日本のおかげだと、中国の会社と日本の会社をつなぐ「上海経営者協力会」を組織して、中国と日本のビジネスがスムーズにできるようにと奮闘しています。上海経営者協力会は月に一度、例会を開き、講演を聴いて名刺交換や商談の機会を設けています。上海は国際金融都市だけあり、会員は商社、貿易会社、会計事務所、弁護士、不動産、飲食業、経営コンサル、留学コンサル、語学教室、旅行社、製造業など、多くの業種の社長や支店長が名を連ねています。私もこの上海経営者協力会に参加させてもらい、多くの中国人や日本人のビジネスマンと交流をもち、たくさんの友達ができました。

この頃、通常であれば休日や長期休業中は上海市外へ出ることができていたので、ずっと上海市内にいなければならないことは少し苦痛でした。そこで、私は上海経営者協力会で出会った中国人の友人に相談し助けをもらいながら、大型バスをチャーターして日本人学校の職員向けに上海市内歴史研修や太極拳体験などの現地研修会を企画しました。

上海市内歴史研修では、「マニアック上海—上海の中の日本—」と題し、日本租界や芥川龍之介が宿泊した万歳館など通常の観光では決して行かないディープな場所を見学しました。また日本文化を研究している中国人の先生が私たちのために来てくださり、昔の上海や日本との関係を説明してくださいました。この企画はとても好

評で、見学地を変えながら5回行いました。

太極拳体験は、上海経営者協力会で知り合ったあった太極拳上海チャンピオンの亜先生に太極拳の体験をさせてほしいとお願いしました。すると、快く受け入れてくださいました。当日は上海体育大学の学生さん数名と、太極拳世界チャンピオンで上海体育大学の教授をされている謝先生も来てくださいました。日本人学校関係者が太極拳の体験に来るといことで、亜先生の師匠である謝先生が太極拳を専攻している学生を率いて、我々の指導にあたってくださったのです。謝先生、亜先生、上海体育大学の学生の皆さんは手取り足取り私たちに太極拳の指導をしてくださいました。半日の日程でしたが、とても充実した楽しい体験会になりました。

(2) 日本文化を中国で広めている許先生

私の息子が通っていた将棋教室の許建東（シュ ジェンドン）先生

とのエピソードを紹介します。許先生は、1963年生まれで、上海財經大学金融科を卒業し、中国工商銀行に勤めました。



仕事も順調で、課長まで昇進したころ、外国の資本主義を見てみたいという気持ちが強くなり、周囲の反対を押し切って銀行を辞めて日本へ渡ったそうです。日本での生活の中で将棋と出会い、以後、将棋を本格的に学び、アマチュア五段の資格を取るまでになりました。



中国にも象棋（ジャンチー）という、将棋に似たゲームがあります。しかし、象棋の駒は前にしか進めず、いわば攻撃の発想のみです。

しかし、将棋の駒は後ろに下がるので、攻めと同時に守りが求められます。また象棋では相手の駒をやっつける時に「殺す」と表現して、倒した相手の駒は盤上から消えます。これに対して、将棋では「取る」と表現して、

相手の駒を捕らえ、自分の味方につけ、自由に使うことができます。相手を殺してしまうのではなく、生かすことで味方につけるといふ、相手への思いやりにつながる考えなのです。また将棋は、礼に始まり礼に終わる、勝ってもおごらず、負けたら「参りました。」と素直に相手の力を認めるなど、対戦相手を尊敬する気持ちや対局中の姿勢など、礼儀作法を大切にしています。特に子供にとっては、将棋をやることで頭をよく使い、考えるようになるので論理的思考が身につく、学校では数学の成績がよくなるそうです。

上海へ戻った許先生は、この素晴らしい将棋を中国で広めて子供たちの教育に役立てたいと、上海市内の小中高校を回り普及活動を行いました。最初はなかなか理解されず、学校教育に取り入れてもらえませんでした。ようやく取り入れてくれた最初の学校での教育効果が実証されると、瞬く間に将棋を授業や課外活動で取り入れる学校が増えたそうです。ちなみに、中国での将棋は、象棋や囲碁と並んで、頭脳スポーツという体育のひとつに数えられています。ですから、許先生の将棋教室も上海市体育協会に所属しています。

現在、上海市での将棋愛好者は150万人以上に広まり、許先生はこの功績が認められ、2018年に日本将棋連盟から、大山康晴賞（将棋の普及活動や文化振興に活躍したアマチュアに与えられる賞）を受賞されました。現在でも、上海のみならず中国全体に精力的に将棋の普及に努めていらっしゃいます。

私は上海での生活や日本人学校の様子を「松井的上海」というたよりにまとめ、新潟の在籍校の生徒たちに定期的に送っていました。もちろん、この許先生の素晴らしい取組もたよりに掲載しました。

ある食事会の時、在上海日本国総領事館で広報文化部長をされている領事に、許先生の記事が掲載された松井的上海を見せる機会がありました。すると領事が、「これは面白い。ぜひ、子供たちの日中将棋イベントをしましょう。」とおっしゃり、さらに領事館でイベントの話を進める中で、許先生を調べれば調べるほど、優れた取組と実績があることが判明しました。そこで、領事館で許先生を表彰したいという話になり、許先生が在外公館長表彰を受けることになったのです。将棋イベントは「日中国交正常化50周年記念 日中青少年将棋交流イベント」と題して、日本の小中学生33人、中国の小中学生33人、計66人による対局が行われました。その対局の前に、在外公館長表彰の式典が行われ、許先生は大使から表彰を受けました。その様子は、翌日の日本のNHKのニュースで放映されました。また、フジテレビ

の情報番組「news イット！」でも対局の様子と上海で将棋が盛んにおこなわれていることが紹介されました。許先生のように中国人でありながら日本文化の素晴らしさを中国で広めている方がいることを知り、日本人として嬉しい反面、将棋に日本人の考え方や日本文化が凝縮されていることを、私が全く理解していないことに気付かされました。日本も中国も文化や国民性に素晴らしいところがあり、お互いに見習う面があります。まずは人と人が交流をすること、そこからお互いを理解することで、より前向きで豊かな未来が開けると思います。

3 出会いから学んだこと

(1) 自分で判断すること

私が中国で出会った方の多くは、困っていると助けてくれるなど優しく、マナーが良く、人懐っこく、人情味にあふれている方ばかりでした。しかし、派遣前までの私の中国人に対するイメージは、まるで違っていました。私は中国人に対して誤解していたことに気がきました。

では、なぜこのような誤解が生まれたのか、一つにはメディアの報道の仕方が原因かもしれません。中国に関わる報道を見ていると、一部の情報を切り抜いて、小さな些細なことをあたかもそれが全てのように報道していたり、情報を面白おかしく報道していたりしていると感じます。

情報は情報を流した人の主観が入り、必ずその人のフィルターがかかっています。もちろん私の情報も、私を感じた主観が入っています。その主観は、正しいとか間違っているとかではありません。たくさんの情報が氾濫している今だからこそ、自分の足でそこに行き、自分の目で確認しなければ真実かどうかは分かりません。真実かどうかは自分が決めることです。真実は人により変化します。そして、自分の国だけの考えや行動では、今のグローバルな時代を生き抜くことは難しいです。様々な国民や人種、立場が違う人々とどのように共同、共働、協働して生きていくべきなのかを考えなければならないと思います。

(2) 国と国民を分けて考えること

中国の経済や軍事的な動きについて、日本は国として毅然とした態度をとるべきだと思います。しかし、中国人に対して毅然とした態度をとるべきではありません。例えば、日本は国としての方向性があります。しかし、日本人すべてが日本の方向性について全て賛成でしょうか。今の戦争をしている大国についても、国としては非

難されるべきだと思います。しかし、大国の国民まで非難されるべきではありません。もしそのようなことをしたら、新たな差別を生むだけで、お互いが不幸になります。上海の人は国と国民を分けて考える人が多いそうです。私も含め日本人は国と国民と一緒に考えがちのような気がします。私は中国人の友達との関わりの中で、国とその国民と一緒に考えないことを学びました。

(3) 情報化社会だからこそ自分で足を運ぶこと

このグローバルな世の中を生き抜くために、世界を知ることとはとても大切です。だからこそ、日本人はもっと日本国外へ足を運ぶべきです。大企業はどんどん海外へ進出していますが、若い学生や一般の人も日本国外へ出るべきです。今は情報化社会で、ネットを見れば情報はすぐに手に入ります。しかし、それはあくまでも知識だけで、その情報を五感で感じることはできません。実際にそこへ行き、世界を肌で感じるのが大切だと思います。そこから、世界の中で自分はどのように行動しなければならぬのかが見えてきます。

中国は昔から留学がとても盛んです。今でもアメリカ、ヨーロッパ、日本などで、中国の若者が世界中で勉強して、知識と経験、つながりをもって、やがて母国の中国へ戻ります。今の中国の急速な発展は、若者がどんどん留学していることも一つの理由だと思います。

4 知識や経験の還元

(1) 教職員への伝達

私たち在外教育施設派遣者は、派遣中に得た知識や経験を日本の教育に還元する義務があります。それなのに還元したくても還元する機会がないという話をよく聴きます。全海研の都道府県組織の報告会や自分の学級の子供たちに派遣中の写真を見せたり話をしたりすることは容易にできますし、全海研の会員の皆さんや子供たちは目を輝かせながら聴いてくれます。しかし、他の教職員や他の学級の子供たちに話をする機会を得ることは、多忙な学校現場にとってはとても難しいです。私も同様に派遣中の経験を周りに伝えることができず、歯がゆい思いをしていました。そのような中、全海研の都道府県組織である新潟県国際理解教育研究会で私の経験を報告する機会を得ました。それを聴いてくださった先輩派遣者の先生が、私の勤務校があるJ市の教育長と仲がよく、「松井の話をぜひ聴いてほしい。」と教育長に連絡してくださったのです。後日、私のところに教育長から連絡が

あり、教育長室で直接、派遣報告をさせていただきました。教育長も私の話を真剣に聴いてくださり、「ぜひこの報告を市の教職員にも聴かせたい。」とおっしゃったのです。そして、J市で行っている若い教職員向けの研修会の一つで、日本人学校での経験と出会いについて話をさせていただきました。今後もこのような機会を大切にしていきたいです。

(2) 子供たちと世界をつなぐ

上海在任中3年目の時です。私のスマホに「この前は話が出来てとても楽しかったです。また、話がしたいので〇月〇日の夜は空いていますか？」とのメッセージが来ました。たぶん上海経営者協会で出会った人だと思ったのですが、顔が思い出せません。また、どのような話をしたのかも記憶にありません。でも、OKを出してしまったのです。相手が指定してきた場所と時間は妻に伝えて、「何かあったらよろしく頼む!」と言い残し、相手が指定した日本食レストランに向かいました。通された部屋で待っていると、相手がやってきました。話を聞くと、彼は山東省政府の役人でした。毎月、北京や上海に出向き、情報収集をするのが彼の仕事だそうです。そして、なぜ私を食事に誘ったのか。実は山東省は孔子の生まれ故郷で、山東省には「孔子基金会」という組織があるそうです。その孔子基金会で日本人学校の生徒を山東省に招待し、山東省の子供たちと交流させたいとのことでした。とてもうれしい提案でしたが、この時は新型コロナの影響で日本人学校の児童生徒は上海市外への移動を厳しく制限されていました。そして、私ももうすぐ帰任でした。この提案は残念ながら断るしかなかったのですが、その代わりに「私は新潟へ帰るので、新潟の子供たちと山東省の子供たちを交流させてもらいたい。」と提案しました。「ぜひお願いします。」と、彼は私の提案をととても喜んでくれました。私は新潟へ帰ってきましたが、いつかこの提案を実現したいと思っています。そして、オンラインの交流ではなく、実際に双方が行き来して直接交流できるような機会を作りたいです。

(3) 社会と教育をつなぐ

帰任後、私が派遣前からお世話になっていた地元の会社の会長さんから、上海での話を聴かせてほしいと連絡をいただきました。その会長さんとは上海在任中も何度か連絡をとらせていただいていた。会長さんに私の経験と出会いについて話をすると、会長さんから「ぜひ地元のロータリークラブで話をしてほしい。」と依頼が

ありました。私はロータリークラブという名前は知っていましたが、詳しくは知りませんでした。調べてみると、ロータリークラブとは、友好と奉仕を志す人々の団体で、奉仕の理想を信条とし、会員は職業を異にする善良な成人で形成され、それぞれの地域にロータリークラブを結成し奉仕活動を展開している世界的な団体だそうです。ただし、中国にはロータリークラブはないそうです。そして、会社の代表が会員になるケースが多く、定期的な例会を開いて講演を聴いたり、米山記念奨学会という、日本に留学をしている外国人学生に奨学金で支援したりしているそうです。そのことを調べたとき、どこかで聞いたことがある組織だと思いました。そう、上海経営者協力会です。上海経営者協力会は、主に会社の代表が会員で定期的な例会を開いて講演を聴いたり、米山倶楽部という中国に留学をしている日本人学生に奨学金を支給したりしています。そこで、于さんにロータリークラブとの関係を聞きました。すると以下の回答がありました。「お久しぶりです。ロータリークラブでのご講演、素晴らしいです！私は、留学生時代の1997-1998年度、ロータリークラブの米山奨学金をいただいていた。また岐阜城ロータリークラブの定例会に参加しました。岐阜城ロータリークラブのやりかたを参考にして2009年1月上海で上海経営者協力会を創立しました。(中略)社会奉仕と恩返しのため、2014年上海で米山倶楽部を創立しまして、上海で勉強している日本人留学生に支援しております。(後略)」

30年前にロータリークラブの米山奨学金で支援を受けていた留学生が母国の中国へ戻って活躍し、今は恩返しとして日本と中国のかけ橋となって、中国で日本人留学生を自分で作った組織の奨学金で支援していたのです。その志の高さと行動力に胸が熱くなりました。ぜひ、このことをロータリークラブの方々に伝えたいと思います。

4 おわりに

文科省の派遣教員は派遣先を選ばません。その中で、私は派遣先の上海で偶然、30年前の同級生である于さんに会い、彼のおかげで中国人コミュニティに入ることができました。上海は東京の約3倍の人口です。この出会いは、偶然にしては出来過ぎていると思います。将棋の許先生との出会いも、将棋に全く興味がなかった私にとって不思議です。そもそも、日本人学校へ行きたいと思ったことも、熱い想いや大きな信念があったわけはありません。今回、上海へ赴任し、現地の様々な人た

ちとつながって関わったことは、既に私の人生の中で運命づけられており、この出会いは必然だったようにさえ感じます。そして、帰国してからも、さらにつながりが増えたり、別々のつながりと思っていたことが私を通してつながって一つの輪になったりしています。少し大袈裟ですが、私に国際理解教育を通して日本のみならず世界を平和にする役目があるのではないかと感じることもさえあります。今後は、私の経験や知識を私と関わる子供たちや教職員だけでなく、もっと多くの方に知っていただきたいと考えています。日本や世界の人々が手と手を取り合って、さらに幸福な世の中を創っていく、私が一助になれば幸いです。

上海通信 上海日本人学校 浦東(フードン)校	上越市立城北中学校生徒向け通信 松井的上海	第17号 令和3年11月8日 発行者 松井 明
------------------------------	---------------------------------	-------------------------------

お世話になっている中国の人々③



許建東(シユ ジェンドン)先生(左)と私の息子(中央)と私(右)

許建東(許建東:シユ ジェンドン)先生です。私の息子が通っている将棋教室の先生です。許先生は、1963年生まれで、上海財経大学金融科を卒業し、中国工商银行に勤めました。仕事も順調で、課長まで昇進したころ、外国の資本主義を見たいという気持ちが強くなり、周囲の反対を押し切って会社を辞めて日本へ渡ったそうです。日本で生活の中で将棋と出会い、以後、将棋を本格的に学び、アマチュア五段の資格を取るまでになりました。

中国にも象棋(シャンチー)という、将棋に似たゲームがあります。しかし、象棋の駒は前にしか進めず、いわば攻撃の発想のみです。



中国の象棋(シャンチー)

しかし、将棋の駒は後ろに下がれるので、攻めと同時に守りが求められます。また象棋では相手の駒をよっつける時に「殺す」と表現して、倒した相手の駒は盤上から消えます。これに対して、将棋では「取る」と言って、相手の駒を捕虜として捕らえ、自分の味方につけ、自由に使うことができます。相手の駒を殺してしまうのではなく、生かすことで、最終的には相手をすべて味方につけるという、相手への思いやりにつながるのです。また将棋は、礼に始まり礼に終わる、勝つもおごらず、負けたら「参りました」と素直に相手の力を認めるなど、対戦相手を尊敬する気持ちや対局中の姿勢など、礼儀作法を大切にしています。特に子どもにとっては、将棋をやることで頭をよく使い、考えるようになるので論理的思考が身につく、学校では数学の成績がよくなるそうです。

上海へ戻った許先生は、この素晴らしい将棋を中国で広めて、子どもたちの教育に役立てたいと、上海市内の中小高校を回り、普及活動を行いました。最初は、なかなか理解されず、学校教育に取り入れてもらえませんでした。ようやく取り入れてくれた最初の学校での教育効果が実証されると、瞬く間に将棋を授業や課外活動で取り入れる学校が増えたそうです。ちなみに、中国での将棋は、象棋や囲碁と並んで、頭脳スポーツという体育のひとつに数えられています。ですから、許先生の将棋教室も上海市体育協会に所属しています。



将棋教室が大切にしている人間教育「礼・智・雅・悟」の標語

現在、上海市での将棋愛好者は150万人以上に広がり、許先生はこの功績が認められ、2018年に日本将棋連盟から、大山康晴賞(将棋の普及活動や文化振興に活躍したアマチュアに与えられる賞)を受賞されました。現在でも、上海のみならず中国全体に精力的に将棋の普及に努めていらっしゃいます。

今まで私は将棋には全く縁がありませんでした。上海に来て息子が将棋を習いたいと言ったことで、偶然、許先生に出会うことができました。許先生のように中国人でありながら日本文化の素晴らしさを中国で広めている方がいることを知り、日本人として嬉しい反面、将棋に日本人の考え方や日本文化が凝縮されていることを、私が全く理解していないことに気がきました。日本も中国も文化や国民性に素晴らしいところがあり、お互いに見習う面があります。まずは人と人が交流をすること、そこからお互いを理解すること、より前向きで豊かな未来が開けると思います。

【全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会(全海研)資料】

1 全海研が考える在外教育施設での5つの目標について

① 国内と同等の教育環境の設定

在外教育施設の最大の目標は、海外において国内と同等の教育環境を創り出すことであり、それが派遣教員の使命です。例えば、次のような難しさに直面します。

少人数学級や複式学級の指導、免許外教科指導、実物教材や教具の入手、校外学習や宿泊行事の制約、生活・自然環境の違い、国際結婚家庭など様々な背景をもつ子どもたちとその親、日本語指導や現地語教育、英語教育、さらには日本ではあまり経験できない治安の悪さや劣悪なインフラ、政治的なリスクにも直面することもあります。そうした環境下でも派遣教員は、常にチャレンジしながら子供たちのために主体的・対話的で深い学びを教室の中で進めていかねばなりません。

② 多文化共生社会の担い手の育成

すべての子どもたちが、多文化共生社会の担い手です。平和なグローバル社会は、多文化共生から生まれると考えます。この「多文化共生」という考え方は、怨親平等、おもてなし、気遣い、利他などの日本文化特有の風土で育まれました。

③ グローバル人材の育成

在外教育施設は、グローバル人材の最高の育成の場です。海外での貴重な生活経験をもとに、国際社会で活躍し、貢献できるリーダーを育てる責務があります。日本の在外教育施設で学んだ人が、国を超えて世界で活躍することは、日本文化の世界への挑戦でもあります。そのために、教師自身もグローバル教師をめざします。

④ 我が国の「魅力増進活動」の拠点として日本人学校のさらなる国際化

日本人学校には、学級活動や学校行事などの特別活動や日常的な清掃活動など、日本独自の教育スタイルがあり、すぐれた教科指導を広く発信することで保護者の期待にも応えられます。新しい学習指導要領の理念をしっかりと理解し実践することは、グローバルスタンダードな教育にもつながっていきます。

また、派遣国には、日本に関わりがあったり、日本の教育にあこがれたりする親もおり、多様な国籍の子どもの受け入れはこれからの課題です。そして、現地校やインターナショナル校との交流の中で、日本型教育の良さを積極的に発信することは現地社会だけでなく、邦人社会へのアピールにつながるものと考えます。

⑤ 言語教育の重要性(日本語教育・英語教育・現地語教育)

国内においても日本語指導の必要性は高まっています。グローバル化の最前線にある在外教育施設での日本語教育への取り組みは大いに期待されています。

また、グローバル言語としての英語や現地語の習得も、国際理解教育では、大切な目標です。教師は、子どもの前で外国語をうまく話すのではなく、コミュニケーションを取ろうという意欲を見せることで国際理解教育は始まります。

AI翻訳に頼るだけでなく、現地語を学び、話したり聞いたりすることで、その国の文化や考え方の違いに気づき、より深い異文化理解がもたらされます。

2 全海研が考える国際理解教育の17の目標について

全海研では、国際理解教育の目標を17のキーワード（概念）でまとめています。ここでは、詳しく解説する余裕はありませんから、**全海研のホームページをご覧ください**。この17の目標概念は、帰国後の実践においても重要な役割を持っています。



○「知識」

- ①国際協調・平和
- ②文化的多様性と共通性
- ③相互依存
- ④正義・公共性
- ⑤共生
- ⑥持続可能性
- ⑦民主主義

○「思考力・判断力・表現力等」

- ①批判的思考力
- ②課題解決能力
- ③想像力
- ④コミュニケーション能力



○「学びに向かう力・人間性」

- ①人権意識
- ②寛容・共感・エゴケー
- ③協力・協調性
- ④誇り・自尊心
- ⑤行動・参画・チャレンジ
- ⑥グローバルな意識

目標概念は、教育活動のターゲットであると同時に、教育活動を評価する物差しのようなものです。目標概念を絶対視することは危険なことから、自分の教育活動を振り返る道具として柔軟に活用することが大切です。

3 在外教育施設勤務における4つの留意点

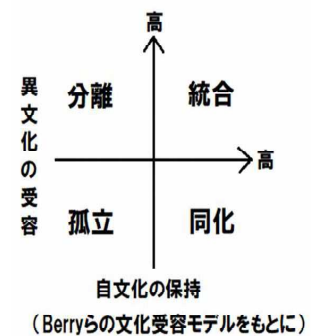
全海研が作成した異文化対応研修プログラムなどを参考に、現地でも研修を進めてください。詳しくは、全海研のホームページから。



① 異文化への健全な適応

多くの派遣教員はこれまで海外生活の経験もなく、まさに手探りの3年間を同僚とともに過ごします。海外で異文化にどのように適応していくかは、実はとても大きな課題なのです。

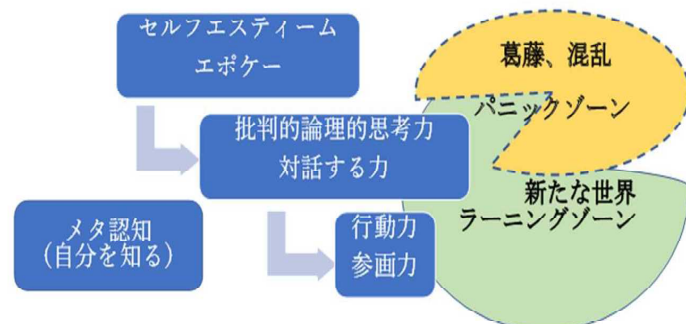
Berryの文化受容モデルによれば、自文化の保持と異文化の受容の間に、健全なバランスをとれている「統合」を目指すべきでしょう。外国かぶれの「同化」や、逆に外国を見下す「分離」は、歪んだ適応と言えます。また、日本での生活経験のない子どもの中にはいずれの文化も身につけていない「孤立」も見受けられます。まず、教師は自らの異文化適応の状況を客観的に把握しながら、教室で国際理解教育を進めていく必要があります。さらには、子どもや保護者の適応状況に応じて、適切な指導も求められます。



② 海外で生活する難しさ(エポケー・セルフエスティーム・クリティカルシンキング)

現地語や英語がしゃべれない、生活が不自由だ、相談相手がないなど異文化での生活にはストレスがつきものです。まずは、「海外とはこんなところ」とあきらめる態度(エポケーと言います)からスタートし、じっくりと生活圏を広げ、

言葉の壁を乗り越えていきましょう。頼りになるのは、自尊心や自己肯定感(セルフエスティーム)です。また、自分の思い込みから自由になるための批判的思考(クリティカルシンキング)を鍛えてください。



③ 教職員間の人間関係が難しい～学校の中の異文化

海外の日本人学校の閉鎖的で狭い社会では、想像以上に人間関係がこじれることがあります。派遣年次や職員集団の分裂、派閥化によるトラブル、現地採用教職員とのトラブルなど、学校内の人間関係から起こるトラブルは大変に深刻です。日本人同士でも考え方・感じ方・学校文化は異なります。常に他の教職員の声に冷静に耳を傾け、自己の言動に思い込みやパワハラはないか振り返ることが大切です。

日本の教育は教員集団の足並みをそろえたきめ細かい指導と絶え間ない工夫改善が特色です。そうすると、同じ目的でも都道府県によってターゲット（目標）が異なり、やり方も千差万別となります。それは習慣化されて日常にしみついていますから、違う考え方ややり方を受け入れるのが難しいのです。しかし、この日常のちょっとした差異こそが、異文化理解の始まりと考えてください。

④ 帰国後に海外体験を生かすにはもうひと踏ん張り

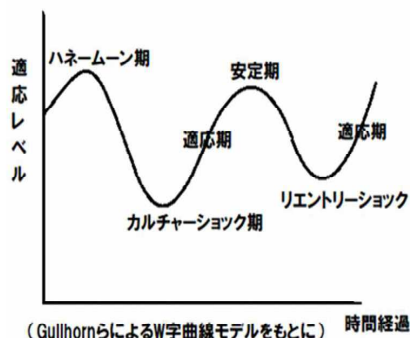
帰国前の高揚感が高いだけに、帰国後の海外体験への無関心やアイデンティティの揺さぶりによって、落ち込みや失望感、孤独を感じるリエントリーショックに陥りがちです。

また、海外の体験談の賞味期限はすぐに切れまです。いつまでも海外体験というコンテンツにこだわるのではなく、自分の海外体験を、国際理解教育の17の日標から見直して一般化する必要があります。とりわけ、「知識」の観点だけでなく、「思考・判断・表現等」「学びに向う力・人間性」の観点から海外で身につけた能力や考え方を分析してみてください。

このために、全海研では「①海外体験振り返りシート」と「②国際理解教育目標シート」を作成して、派遣教員の海外体験を国際理解教育の目標で再構成するお手伝いをしています。帰国報告が、単なる見聞記ではなく、国内教員との協働の提案になることを期待しています。「海外ではこんなおいしい卵料理があったよ」から、「卵を使った料理の新たなヒントが海外にあったよ」に変わってください。

この作業を行うことで、帰国報告や帰国後の国際理解教育への取組がワンステップ上がるだけでなく、新たな分野での活躍の踏み台となることを期待しています。

※シートの活用や書き方は、全海研ホームページにアクセスしてください。



(GullhornらによるW字曲線モデルをもとに)

○最後に、派遣前、派遣中そして帰国後、所属する（していた）都道府県の国際理解教育研究団体とは必ず連絡をとってください。報告や相談、また帰国後も在外での研修の成果（うまくいかなかったことも含めて）を後に続く先生に伝えてください。

全海研へのお問い合わせはこちらに。 info1@zenkaiken.jp



②国際理解教育目標シート 派遣国 _____ 学校名 _____ 学校 氏名 _____

1	<p>・①の「海外体験振り返りシート」で、目標ごとにまとめた実践の中で、とりわけ在外教育施設への派遣の中で、最も印象的な出来事を「2」の欄に書いてください。</p> <p>・「2」の番号欄には、その活動の目標を下の国際理解教育の目標から選んで、番号を書いてください。</p> <p>・「知識」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」の3つの観点から、必ず入るように選んでください。最低3つの欄は埋めることになります。</p> <p>・17つの国際理解教育の目標以外に、自分が考える目標がある場合は、「その他」の欄にその目標を書いて、その番号を「2」の欄に書いてください。</p>
	<p>◆「知識」 ①国際友好・平和 ② 文化的多様性と共通性 ③ 相互依存 ④ 正義・公共性 ⑤ 共生 ⑥ 持続可能性 ⑦ 民主主義</p> <p>◆「思考力・判断力・表現力」⑧ 偏見・差別・ステレオタイプを見抜く力（批判的思考力） ⑨ コミュニケーション力 ⑩ 課題解決能力 ⑪ 想像力</p> <p>◆「学びに向かう力・人間性」⑫人権意識 ⑬ 寛容・共感・受容 ⑭協力・協調性 ⑮誇り・自尊心 ⑯行動・チャレンジ（人生を切り開く） ⑰グローバルな意識 ◆その他（⑱ _____）</p>
2	<p>在外派遣で自分にとって最も印象的な出来事は国際理解教育のどの目標にあたりますか</p>
	番号
	番号
	番号
	番号

3	<p>教師として、指導観・教育観は変わりましたか。もし、変わったとしたならば、帰国後どのように生かしていこうと思いますか。</p>
4	<p>派遣中に海外で大切だと感じ、かつ国内でも子供たちに指導してみたいと思う3つの国際理解教育の目標を挙げてみよう</p> <p>① _____</p> <p>② _____</p> <p>③ _____</p> <p>では、この3つの目標を、国内の学校でどのように指導していきますか。</p> <p>① _____</p> <hr/> <p>② _____</p> <hr/> <p>③ _____</p>
5	<p>国際理解教育の大きな目標を考えてみよう</p>

派遣教師の、考える資料として

① 「47 都道府県出身教師と一緒に仕事。」

素晴らしい「協働」作業の仲間として働ける。地域的に、季節感的に、競技間格差、教委の考えの違い等により、行事の立案開催方法、役務への認識の相違、会議内容の相違、小中職員一緒にの会議、派遣年次間交流等。

② 「日本人として国を意識する生活。」

現地での見られ方、他国民との同一視への反発、国批判イコール個人批判等。個人として日本近代史を把握し、さらに日本文化と言われる、古典文学等も、一通りの把握が必要になってきている。

③ 「違った文化の中で生活。」

異端視される自国文化、尊敬される自国文化、習慣の違いからのストレス、習慣からの優越感等。人間はあくまで道理すなわち、周りの人々と「協働」していける生活をおくれる精神的強さ。

④ 「家族一丸の生活。」

社会環境からの単独行動の難しさ、家族単位での行動、労働時間制限の徹底からの家族生活の違い等。宇宙船家族号の出発として、家族の結びつきを深められる絶好の機会になる。

⑤ 「母語以外の言語習得が必要である生活。」

日常生活用語習得、コミュニケーション確保の重要性等から。簡単な用語や、日常的に近所近隣とのコミュニケーションを持つためにも、また、滞在国、世界情勢をしっかりと把握するためにも必ずマスターを！

⑥ 「危機管理を意識する生活。」

政治的国家意識、民衆からの目の意識、生活様式の違い財産権意識、宗教意識、等。日本とは違って、周りの人々の考え、宗教観、等の違いからの発言、行動、食生活での食品の購入等にも、配慮する。
(国家統制品等のヤミ購入には注意する。)

⑦ 「日本を代表し、活躍する人との交流」

国家対応意識の人々との交流、文化人との交流等、学校教育上、児童生徒に有意義な方々もいるが、逆の

ケースも報告されているので、有名人の来校等の際には、児童生徒との接触には、人物の見極め等しっかり対処していく必要が重要になる。

⑧ 「世界で活躍する人との接触」

物資移動に伴う関係者との交流、世界先端技術者との交流、技術労働指導者との交流、現地文化人との交流、芸術文化人との接触等。教育には、強い精神力が必要になる、その力を持っている方々が多いことから学ぶ点は多くあり、児童生徒への教育に関わる者にとっては大変学ぶべき点が見つかる可能性がある。

⑨ 「上昇志向の強い方々との接触」

保護者としての海外滞在者、教育対象の児童生徒、日本文化への強い関心者、帰国後の活躍も視野の教師。

⑩ 「公私のない生活」

教師関係者の発言、日常生活空間の共有、研修出張での派遣、土日にも依頼があれば快く快諾し仕事を！

⑪ 「努力する児童生徒」

語学習得・学力向上に努力する児童生徒、国内にいたら真剣にやらなくても良い語学も必要間から真剣な習得をしている。

⑫ 「学校経営者との接触」

シビアな経営感覚者との接触、教育分野への認識の再確認等。教具、教材等から紙一つまで、経済感覚を持って有効活用しなければならぬ、経済感覚を求められる。
これらの経験は、教師として大変すばらしい貴重なものです。

⑬ 「貴重な海外経験を国内教育へ還元する」

これから生きる児童生徒が、世界的な視野で物事を見られるよう、視野を広げられる教師に育っていただきたい。児童生徒のうちから、世界的視野での思考をすることで、為政者になっていく者の、争いを避け、平和的關係構築を目指す「素地」を養成できる。国民的視野での生活圏構築に貢献できるのではと考えている。



児童生徒に「夢・希望」を与える在外教育施設に

今後、世界で活躍する児童生徒に夢・希望をあえる「日本人学校」でできること

- ・ 学校教育という道が、平坦で順調に邁進できればよいのですが、なかなかそのようにはいかい部分があるかと思えます。各地区の校長会でお話を伺うなかで思うことは、平坦な道を進めるような人間関係の学校は少ないと思いました。長期的な展望のもとに行われる教育や慎重な運営が今後さらに大事です。世界で活躍する児童生徒に夢や希望を与える日本人学校として、できることは何かを考えて欲しいと思えます。
- ・ 戦前の在外教育施設は、1877年（明治10年）釜山にできてから、各地に設立されました。第2次世界大戦で途切れ、その後、昭和31年タイ・バンコク日本人学校が設立され、東京学芸大から教員が派遣されるようになりました。昭和46年に海外子女教育振興財団ができ、その後、昭和49年に全国海外子女教育国際理解教育研究協議会が発足しました。
- ・ 平成23年に上海日本人学校高等部が設立されましたが、現在多難な道を歩んでいる状況にあります。

通学児童生徒の多様さで

「日本語のインターナショナルスクールを」

2016年4月、日本人学校と補習授業校の人数の割合が逆転をしました。これは、日本語より、世界で使えるツールとしての英語学習に関心が高まっているからです。これには、日本人学校でも、多くの国々からの児童生徒が学んでいれば、自然に、インターナショナル感覚が養われます。そこで、各地の在外教育施設で、日本以外の児童生徒を入学させることにより、日本人学校のインターナショナルスクール化が推進できますし、更に、日本への親日家養成にも貢献できます。

教育研究が盛んに行われていますが、特に、小学校児童に対する教育は興味関心を高めることであって、知識を高め深めることではありません。

発問について教師が疑問形で児童に投げかけているのか、発問も慎重に検討しているのか、さらに、児童同士での対話や討論ができているのか等について管理職が素率優先してチェックする必要があると思えます。

- ・ コミュニケーション能力について、世界各国から児童生徒がいると、それは、多様な角度からの理解が深められる。各国のインターナショナルスクールの位置づけは、多言語の児童生徒が在籍していることです。
- ・ 在外教育施設は、自分の母語で自由に話せる場であり、

とても大きなことだと思っています。

日本の教育は、高く評価され、日本人学校への入学希望も多く出てきている。この現実を生かしていきたい。

海外の特殊性

・ 児童生徒は、日本語の話せる機会は、海外では一般社会に出たらありません。学校内では、自由に操れる日本語による教育を欲しており、年齢的にも最適な時期です。日本語を使った授業等を充実して頂ければ有り難いです。

・ 児童生徒にとって、大切なこの時期に誰と出会い、どう過ごしてきたか、年齢的に最適な時期にどういうこと行ってきたのか。現実を見ることは無理が多いのが、世界各地・日本各地でも同じです。したがってバーチャルなものを見て、それを現実のものとして見ていく。バーチャルというものはものすごく大事で、知識で知っていると、現物に触れたときの感動は、それは言葉にはいい表せない大感動を伴います。各学校において、ぜひ、バーチャルな写真集、図鑑等を図書室にたくさん揃えて欲しいと思えます。

最近の子ども実態

・ 昨今、子ども達の多くは、個室を与えられています。実際は勉強をせず、ゲームをしたり漫画を読んでいたりと睡眠時間が少なくなっている子どもがたくさんいます。そのため、脳の活性化が疎かになっているといわれています。ティーンエイジャーと呼ばれる子ども達の睡眠時間は、8時間から10時間必要であると脳科学の分野からいわれています。睡眠時間が確保されているか、親に投げかけ、睡眠時間の確保を訴えて欲しいです。睡眠時に「知識が脳」に定着されていくと脳科学の中でいわれています。したがって睡眠の直前には、暗記科目をやるのが一番大事だといわれています。このようなことを保護者や若い先生方に話していただきたいと思えます。

・ 睡眠時間が少ない子どもに対して宿題の量も考えないといけません。例えば、徐々に量を多くしていく、また、内容面も興味関心を示すようなものであるか、適度な苦難を強いるようなものか、さらに、親や友達と会話をし、聞き出さないとわからない点等を加味することが大事かと思えます。

・ 脳には「汎化」という特徴があります。ひとつのことに興味関心を高めるとその周りにも影響していくそうです。例えば、池に石を投げたときに波紋が広がりますが、

それと同じように、能力が伸びるとそれに直接は関係しない部分も伸びていくということです。ドジャースの大谷選手も投手と打者の二刀流で活躍しましたが、一つのことに秀でてくれば他のことも全部追従して秀でてくるという考え方が脳科学にあるようです。

- ・校内巡視の際に、教師は素晴らしい授業をしているでしょうか。校長が、授業を参観して気付いたことはチェックカード等を利用して、校長から授業者にカードを渡せるよう働きかけるとよいと思います。
- ・以前の全国大会で、マルハ大洋・サンディエゴの岸さんから講演をいただきました。岸さんのお話の中で、若い頃、大きな物件の契約後、取引先の方から日本について質問されたが何も答えることができず、契約破棄になったそうです。英語を話せるのは当たり前でも、自国について知らなければどうしようもない。それ以来、人事面接では必ず日本の事について質問するようになったそうです。そのようなことから、特に日本を離れ海外にいたら日本について知る必要があるのではないかと考えています。日本では、四六時中、日本文化に染まっているが、継承されていない部分も多いと思います。日本文化といえば、歌舞伎という大衆演劇がありますが、これ以上に高度な能や狂言もあります。しかし、能や狂言について答えることができる人はほとんどいないと思います。

全国からの教員集団ならではの教材開発を

- ・私達にとってより身近な食文化はどうでしょうか。日本各地には様々な保存加工食品（干す、発酵、塩漬け、燻す）があります。全国各地から教員が集まっているので、知恵を出し合って日本の食文化について教材を作成してみたいかでしょうか。その結果、職員の結束が一段と深まるのではないかと考えています。連帯意識を持った人々は強い結束力を持ち、互いを尊重しながら、それぞれの地域性を理解することに繋がるでしょう。さらに、日本の良さが理解されるのではないかと考えています。日本と現地の違いだけの教育では、ステレオタイプの人間をつくり、グローバルな視野からみた人間性は育たないと思います。北米欧州地区は、児童生徒数が増えていますで、この子ども達にいい影響を与えてくれるとありがたいです。
- ・世界には、日本に対して非常に興味関心をもっている人が多くいます。日本人学校の児童生徒は、学校でも家庭学習でも繰り返し日本語を学んでいます。補習授業校の児童生徒は、現地校や国際学校に5日間、補習校に1日通い、家庭では自習や日本のしつけ、現地校の宿題をしています。また、日本の教育機関に通ってこない児童

生徒は、英語や外国語漬けになっており、日本の教育を受けることができない状況にあります。特に現地校等の小学校4年生以上は、宿題がたくさんできるようになり、その中で頑張っている児童生徒もいます。このような状況もよく理解しながら、私達は、これからのグローバル化を目指しながら自国の文化を教えていく必要があると思います。

・私達は、日本人として日本のことをどれくらい理解しているのでしょうか。よく、日本人としてのアイデンティティといいますが、日本の自然環境、位置、国土、人口等、このようなことはおわかりになるとは思いますが、日本の歴史はどうでしょう。近世・近代はやっているのでしょうか。中学校の社会の歴史においては、近代・近世においてはみんな割愛されています。ところが、ドイツの歴史教育はナチスから始まり、それが終わった後、古代からの歴史を学んでいきます。ドイツは、周辺8か国に悪い影響を与えたくないという昔の反省をもとに歴史教育を行っています。私達日本は、近代や現代について何も教えないまま歴史教育を行っています。そこも反省していく必要があると思います。

日本の特殊制

・日本人の原型はなんだろうと問われた時にパッと答えられる人がおられるでしょうか。「丸顔で背が低くて多毛性の人種で足が短くて胴長」と答える人もいるでしょう。現代人はそれとは全く違います。今の子どもたちは、足が長く胴が短く、八頭身になっています。日本の文化はどうかというと、植物生態学者によると針葉樹固有文化であるといわれています。重層的な文化が根底から破壊を受けていないため、日本の文化は、日本独自の文化ではなく、いろんな文化が合体した文化となっています。私たちほぼ全員が、朝鮮の血も混ざっていると思います。・日本人の言語活動はどうでしょうか。あいづちとうなずき、婉曲表現、あいさつ、日本人のジェスチャー、バツとマルの付け方、手招きの仕方。四季、二十四気、七十二候等は、日本の文化行事を支えているものです。

・マスコミで全国版の新聞がでてるのは日本くらいです。フランスの「鎖につながれたアヒル」(ル・カナル・アンシェネ)のような新聞を、私は、将来的に作ってみたいと思っています。そういう新聞社が日本にもできたらいいと思っています。周りに影響されない本当に真実を報道していく。あの新聞社の編集長は、当時の政治機関から何人も虐殺されています。



しかし、そのようなマスコミも、やはり必要であると思います。

・これは熊本地震の翌日のお昼のフライトレーダー 24 です。翌日には、国土地理院により南北の測量が始まっています。東西には宮崎空港から飛んできた飛行機が測量を始めています。日本というのは何かあっても、それにきちんとした対応ができています。このようなものを子ども達に見せることで「日本はすごいんだ」と見直す機会になると思います。

様々な背景を持つ児童生徒に自信を

・異文化の中で暮らしている海外子女は、あらゆる気持で持ち合わせた子どもです。好きで来た子、嫌々来た子、異文化アレルギーを持った子等いろいろな子がいます。そのような背景を理解して教育をしていく必要があると思います。

・子どもが保護者に**自慢できる話題提供を一日ひとつ**先生がしてくれたら、夕げのひと時に親子の会話が成り立ちます。「こんな話、先生がしてくれた」という会話の内容が、人伝にまだ日本人学校に来ていない子ども達の親にも伝わっていくと思います。下手なチラシを作るより、子どもの口伝で友達同士で伝わっていく方が日本人学校の宣伝になると思います。

・ある日本人学校のお話では、スーパーに物がなく、何軒かのスーパーを回って生活用品を購入し、何とか生活し、子ども達を日本人学校に通わせる親の姿があるとお聞きしました。外は出歩けないし大変だけど、その中でも日本人は頑張っているんだということをお聞きしました。ぜひ、先生方におかれましては日本に帰国しましたら、全国大会やブロック大会等に参加し、実際の海外子女教育についてお話をし、後輩を育てていただければ有り難いです。

教材作りへの参画も

・現在、全海研では教材バンクをつくっています。補習校や日本人学校の教材を取り揃えています。是非、ご利用いただければと思います。各校において特色ある教材がありまら、すべて登録していただきたいと思います。教材バンクは二つのサーバーを使っておりますので容量は十分にあります。・また、全海研では、水プロジェクト、生活の工夫プロジェクト、食品加工のプロジェクト、を設定し、講話集も発刊していこうと考えております。講話集は、管理職から一般教員まで、利用できるものを、次の全国大会までに発刊予定であります。これができれば、日本人学校の先生以外の日本国内の先生方にも利用できるのではないかと考えています。

・最後に、各学校におかれましては、全教職員が協働するために、素晴らしい人間関係を構築し、よりよい教育環境をつくっていただければと思います。

よく在外では年次による隔たりが大きいと言われるますが、要は、子ども達をどう、素晴らしい人々になるよう教育しているかです。中には、在外だから、進路指導はしないという学校もちらほら聞いていますが、日本同様に手厚く、保護者、子どもに対して対応していただくことが派遣教師の「つとめ」で有り「義務」です。皆さんは、日本国内においても素晴らしい経験をしていると思います。その経験を年配者から若い方に引き継いでいただいて、ぜひ、温かい教育を実践して頂ければ有り難いと思います。

この温かい教育こそ、日本式教育であると、確信し、実践に励まれることを願っております。細やかな基本事項からの指導が日本式教育でもありますが、さらに発展的教育を推進していただきたいと思います。

在外からの原稿募集

異文化の中に入っていった生活では、入った瞬間から、違和感を覚えるのが、誰でも経験する事です。その違和感を、どのように捕らえていくのかによって、見方は大きく違ってきます。追求型で、なんで、どうして、こんな事をしていくのか、と考えると、また、面白みが出てきます。是非、先生方の興味・関心を高めて、異文化での生活のなかで、素晴らしい人間生活の様子を浮き彫りにしてみませんか。

- ・原稿量：2000 文字単位で (1 頁あたり)
- ・写真等：話題と関連している場面 (個人の写っているものは不可)
- ・人間として努力している様子が分かるもの

(住居への工夫、衣類への工夫、食料への工夫、人間関係への工夫、社会インフラへの工夫、移動手段への工夫、寒暖への工夫、文化への工夫、年中行事への工夫等) 応募先は info1@zenkaiken.jp

全海研プロジェクトについて

「誰でも、どこでも、いつでも」考え、見て、接していける、人間生活の中で、様々な生活様式が存在している。その中であって、自然界に融合した様々な生活上の工夫が存在している。**住居への工夫、衣類への工夫、食料への工夫、人間関係への工夫、社会インフラへの工夫、移動手段への工夫、寒暖への工夫、文化への工夫、年中行事への工夫**、等限りなくいろいろな場面で人々は工夫をし、豊かに快適な生活を目指して人々は工夫しています。

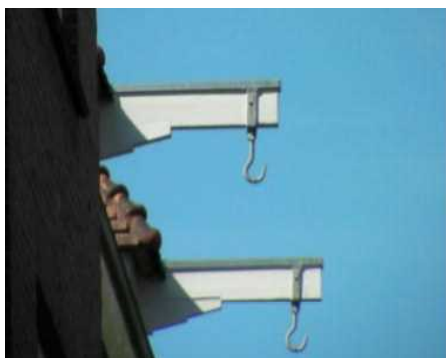
この工夫は、同じ国内でも、一山越えればそれぞれの工夫があり、また、日本では、各家庭においても、隣近所でもそれぞれ違った工夫が見られる。(田舎では一軒漬け物の味に一工夫あり、それぞれが違う)

どこにいても、見ることはできるが、他の物を見ていないことには、その違いも実感できない。自分の家庭内でやっている老人などの風俗・風習行動を批判したりする場面も見かける。しかし、この風俗・風習行動は、長年の工夫の結果行われていることであり、すばらしきことではありませんか。

一例として

その面では、派遣教師経験は、他国や、他民族を見て、知ることができ、さらに多くの工夫を見つけることができる。一例として日本での古くからの携帯食品としての「氷餅」は、カロリーの高い餅を、凍らせて乾燥し、軽く携帯化した食品である。同じ技法は、岐阜・高山地方の「大根」にも適用されたり、南米ボリビア、ペルーでは、「じゃがいも」にも同じ技法が使われ、今でも行われている。このような物を、皆さんで見つけてみませんか、どんな生活をしていても、人々は大変に高い能力を携えて生きていることが実感・理解できますから。

全海研では「水プロジェクト」「生活の工夫プロジェクト」を発足し、素材収集を始めております。皆様のお持ちになっている様々な素材を(映像、写真、お話、生活熟語、逸話、物品、文化用品等)提供頂き、協働して教材化へと進めていくことにしております。ご自分では、教材化できない、でも、他の方が持っているものからの教材化ならできそうである。等、それぞれの適性を生かして、後世に残せる「教材」を残せたら、と思い、全海研で全国・全世界的規模で実施しております。



建物の軒先から出ている鉄柱に取り付けられている「金具」に、使用時に滑車を取り付けられ、ロープが通され、地面にある荷物を吊り下げて、目的の階上に上げて、窓から室内に入れるという作業が昔から今でも行われている。(アムステルダム)

全海研・全国大会 開催予定

年一回 2024年一鳥取・米子市(8月8、9日)、2025年一茨城、2026年一岐阜

後 援：外務省・文部科学省・海外子女教育振興財団・地域各県教委

特定課題分科会【1】【教育のグローバル化 IBと日本の教育の融合の視点から】

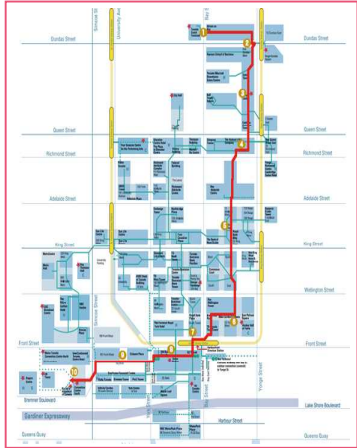
【2】【国際理解教育の再構築】

【3】【派遣経験体験のカリキュラム化 国際理解教育の目標による一般化を通して】

【4】【日本人学校のインターナショナル化】

実践事例発表、トーキングテーブル(派遣希望者研修、あるべき在外教育施設)、野外地域巡検(文化遺産・自然)

地下街がないのに巨大通路で結ばれている街「トロント」中心街



ビルとビルの隣接部分にドアを設置し、お互いに行き来が出来るようにして、冬の寒い時期にも、屋外に出ることなく移動が出来る工夫がされています。

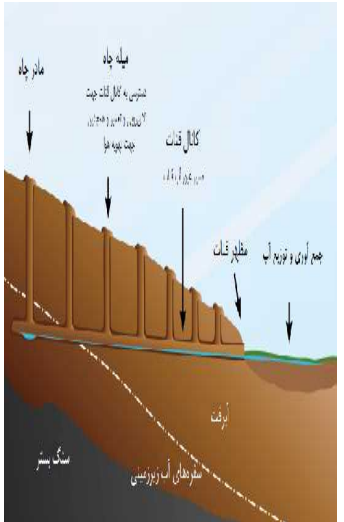
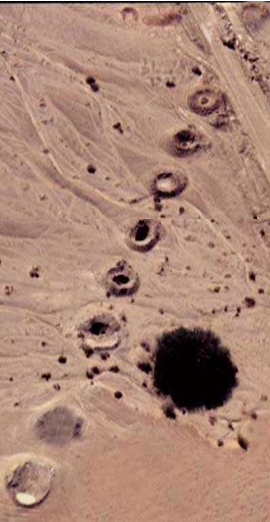


「水プロジェクトの推進」

砂漠地帯での水確保に貢献

遠く離れた山地から人々の住み住居地への配水路として「カナード」は、住民の工夫の最たるものである。下記の写真は、地下水路にたまる砂を書き出すためにもうけられた「砂取り出し口」である。右下記は断面図であり、左側の上流部は、水路までの深さは、かなり深い物になっている。

↓カナード（遠隔地からの水資源移動施設）



日本の水道水水質項目

No.	水道数検査項目
1	一般細菌
2	大腸菌
3	カドミウム及びその化合物
4	水銀及びその化合物
5	鉛及びその化合物
6	砒素及びその化合物
7	ヒ素及びその化合物
8	六価クロム化合物
9	亜硝酸態窒素
10	シアン化物イオン及び塩化シアン
11	硝酸態窒素及び亜硝酸態窒素
12	フッ素及びその化合物
13	ホウ素及びその化合物
14	非イオンの界面活性剤
15	1,4-ジオキサン
16	シス-1,2-ジクロロエチレン及びトランス-1,2-ジクロロエチレン
17	ジクロロメタン
18	テトラクロロエチレン
19	トリクロロエチレン
20	ベンゼン
21	塩素酸
22	クロロ酢酸
23	クロロホルム
24	ジクロロ酢酸
25	ジブロモクロロメタン
26	臭素酸
27	総トリハロメタン
28	トリクロロ酢酸
29	プロモジクロロメタン
30	プロモホルム
31	ホルムアルデヒド
32	亜鉛及びその化合物
33	アルミニウム及びその化合物
34	鉄及びその化合物
35	銅及びその化合物
36	ナトリウム及びその化合物
37	マンガン及びその化合物
38	塩化物イオン
39	カルシウム、マグネシウム等(硬度)
40	蒸発残留物
41	陰イオン界面活性剤
42	ジェオスミン
43	2-メルレイソルネオール
44	非イオン界面活性剤
45	フェノール類
46	有機物(全有機炭素(TOC)の量)
47	pH値
48	味
49	臭気
50	色度
51	濁度

皆さんの住まわれている地域では、いかがですか。また、日本国内の皆様の場合は、簡易水道ですか、上水道ですか。また、水源としているところは山からの湧き水？、河川水ですか。



↑ 塔屋



塔屋内部⇒

ここで、世界各地の上水道の水質基準を見てみると、浄水場では、飲料水に適する「水」が製造されているが、その水道水が各家庭に届くまでには、飲料水として適応条件を満たしていないケースが散見された。

ここで、注目すべき事は、水道管の腐食、劣化での口径の縮小、地下水の流入、等も見られたことである。

この事実をもとに、今後、世界各地の水道水が蛇口から直接飲料できる為には、何をしたら良いのか、考えられる資料構築も必要と感じています。世界の水道水でも最も高度浄水システムを導入し、ペットボトルにして販売している「東京の水」も直接蛇口から飲料する人々が減っていることは、経済的損失面から考えて行く必要性も出てきている。

更に、飲料水だけではなく、昔から空気を冷やすために、屋根の塔屋をパラボアンテナの逆利用で、外気が塔屋に当たると、そのまま真下に風が行き、下部のカナードからの水で冷やして空気が家屋内に循環するシステムを古代から構築してきた中東地区にも関心を示したい。(天然のエアコン)

地方ブロック大会

北海道ブロック大会 (北海道)

東北ブロック大会 (青森・)

北信越ブロック大会 (石川・近江町)

東海ブロック大会 (静岡・)

近畿ブロック大会 (兵庫・神戸市)

四国ブロック大会 (香川・)

中国ブロック大会 (鳥取・米子市)

九州ブロック大会 (佐賀・)

全海研「世界の知恵と工夫 世界から教室へ」冊子原稿募集 みなさんの応募原稿お待ちしております

全海研「世界の知恵と工夫 世界から教室へ」冊子原稿募集！
みなさんの応募原稿お待ちしております。



【願い】

世界で活躍する先生方、日本と世界の両方に目を向けている先生方、地域に密着した素材を生かしていらっしゃる先生方…そんな先生方に冊子原稿募集のお知らせです。

世界には「生きる知恵」が溢れています。

- ・遠くまで水を引くための地下水道
- ・果てなく高い山の上での耕地
- ・家の中に風を呼び込む装置物

お互いに共感でき、努力が感じられる物事について紹介する。

などなど、その土地の風土や気候を生かし、知恵を凝らし、人がより豊かに生きようとする営みが数多くあります。また、加工食品や保存食など、実は日本古来のものだと思っていたものが、他の国々でも見られるものだったなど、思いもよらない共通点を見つけることもあります。

こうした、「生きる知恵」をここに集約し、子どもたちの視野を広げ、価値観を豊かにし、世界に学び、郷土を誇れる思いが持てるような冊子を作成しようと考えました。このような営みを通して、子どもたちの偏見や思い込みをなくし、価値観を広げ「学び合う姿勢」のきっかけとしていきたいと考えます。

冊子の利用は幅広く考えられます。朝の会や帰りの会での先生のお話の中で、星亨先生の監修として、道徳や学芸の導入で…。ほんの短い時間「いつでも・どこでも・だれでも」できる国際理解教育のヒントとしての活用を願っています。

【原稿事項】冊子サイズ A5版

文字数：800字程度～400字程度

(活用のヒントを含む) 敬体表記

写真：1-3枚

【原稿作成について】形式は編集します。

原稿例に示したようなレイアウトをイメージしてください。写真の位置やサイズなどは、当方で修正いたします。文字サイズを統一したいため、文字数はお守りください。

【データ送付について】

・原稿データ (テキスト)

・写真データ

を別々にお送りください。

【写真について】

サイズ：高画質なものを希望いたします。

※原稿を補正する写真を挿入します。書きと引きのようになり、組写真となっても構いません。サイズは余り大きくできませんので、分かりやすい写真をお願いします。

データ送付先アドレス

genkouzkk@gmail.com 又は、info@zenkaiken.jp

- ※ 掲載が希望されるものは早したり、掲載性を大切にしてください、「旅行文」や「旅行記」とならないように心がけて下さい。
- ※ 著作権者の同意の上、写真については、ご自分で撮影されたものもしくは撮影者の使用許可がとれているものと、ネット等からの転用はお控えください。
- ※ 寄せられた写真については、題材の教材化プロジェクトの教材開発でも活用させていただきたいと思っております。
- ※ 掲載及び写真つきまはしては、著作権者の同意の上でのご活用を、全海研での掲載記事やWEB掲載などをご了承ください。

全海研では「教材の教材化プロジェクト」「水プロジェクト」などを同時に進行しています。

まずはHPにお越しいただき、全海研の活動をご覧ください。

<http://www.zenkaiken.jp/>

【原稿例】

内容を反映したタイトルと題名を最初に記載してください。

カテゴリ分けをしていきます。冊子で挿入させていただきます。

1 確実に花に水やりを行う灌水ホース (アラブ首長国連邦) 生活の知恵

アラブ首長国連邦の首都アブジビは「ガーデンシティ」とも呼ばれます。町の中には、ナツメヤシが街路樹として植えられ、たわわに実をつけます。また、町中どこへ行っても、花が咲き誇り、枯れた様子を見ることがありません。公園は芝生で覆われ、夕刻を過ぎた頃から、あちらこちらの公園でパーベキューをして過ごす家族で溢れます。最高気温は45度にもなる国ですが、町中から花が消えることはまずありません。故に「ガーデンシティ」と呼ばれるのです。



そのためには、多くの苦勞が欠かせません。その一つが、国中に張り巡らされている、灌水ホースです。街路樹の根本から公園の花壇の中、果てには砂漠の中のアアシにまで、この灌水ホースが張られているのです。広大な面積に伸びるこれらのホースには、無数に穴が開いており、少しずつ水がにじみ出るように工夫されています。日本でも「点滴ノズル」として販売されています。点滴ノズルとは、同じ位置に少しずつ水を垂らす方法で水やりを行うノズルのことです。広く灌水する方法と比べ、水の蒸発を防ぎ、確実に土の中に水を送ることができます。

これらの水やりのために、日々億単位での資金が必要となります。しかし、人々の暮らしの豊かさのために、また、中東唯一の観光都市として、これら草花の管理は欠かせないのです。国としての威信をかけたプロジェクトの一つとして考えてよいものだと思います。産油国として得た豊富な資金があつてのことなのですが、国家予算に草花の管理が含まれていることは、とても意味のあることです。

【活用のヒント】

- ・灼熱の国で、草花を守ろうとする生活の知恵と資金の活用。
- ・身の回りの公園や街路樹の管理はどうなっているだろうか？
- ・水の管理や使い道に目を向け、私たちの生活と結びつけて考えよう。

岐阜県 久富 雅仁

活用のヒントとして、活用場面の生かし方などを記載していただけたらと思います。

都道府県名とご氏名を記載させていただきます。

メキシコ・ペルー 日系人の音楽教育事情 「アンデスの歌ごえ」 田代 雄康 著 定価 1800 + 税	メキシコ・ペルー 日系人の音楽教育事情 「アンデスの歌ごえ」 田代 雄康 著 定価 1800 + 税	オーストラリア クイズランド補習校の日常 「南十字星の砂時計」 互井 俊之 著 定価 1900 + 税	五大湖の微笑み 生野 康一 著 定価 2100 + 税	北米・デトロイト 補習校奮闘記 「五大湖の微笑み」 生野 康一 著 定価 2100 + 税	宇宙船地球号と地球号の子どもたち 宇土 泰寛 著 定価 2100 + 税	宇宙船地球号と地球号の子どもたち 宇土 泰寛 著 定価 2100 + 税	インドネシアから見た日本の教育 「小さな外交官たち」 清水 良雄 著 定価 2100 + 税	メキシコ・アラスカ アスカリエス日本人学校にて 「プーゲンビエラの青い島」 足立晴香 著 定価 2100 + 税
北米・コロンビア 補習校の子どもたち 「コロパスの夢船」 佐々木 豊 著 定価 2100 + 税	北米・コロンビア 補習校の子どもたち 「コロパスの夢船」 佐々木 豊 著 定価 2100 + 税	ギリシャ・アテネ 日本人学校の子どもたち 「キーサス！ ユーゲ海」 樽本 信浩 著 定価 2100 + 税	国際理解教育選書シリーズ 全海研・監修	台湾・高雄日本人学校の贈り物 「フォルモサの祈り」 松井 聡 著 定価 2100 + 税	オランダ・ロッテルダム日本人学校 「青きボルダールの輝き」 田中 強 著 定価 2100 + 税			
オーストラリア ウィーン日本人学校 「夢歩きドナウの流れ」 辻 証明 著 定価 2100 + 税	タイ・バンコク日本人学校実践記 「メナムよ永遠に」 岡山 典崇 著 谷中 龍三 著 定価 2100 + 税	グアテマラ・青年海外協力隊委員日記 「ケツアールは翔ぶ」 早川 修一 著 定価 2100 + 税	中国・北京日本人学校の子供たち 「遙かなる北京の風」 清水 茂夫 著 定価 2100 + 税	北米・バトルクリーク 補習校母親通信 「ミシガン湖畔のティータイム」 大江 康夫 著 美千子 著 定価 2100 + 税	ペルー・リマ日本人学校通信 「インカの響き風」 杉本 裕司 著 定価 2200 + 税			

グローバルプロジェクト参加者(学校・個人)募集のお知らせ

全国各地に勤務されている海外派遣教員経験者が、今までの経験をもとに、地元で「生活の工夫」を見つけてみませんか。世界広しといえども、各地での生活での工夫には共通点があることもわかっています。その端的なものとして、餅を一度凍らせて乾燥し、軽やかな「水餅」は、日本の登山家に画期的な携帯食料として珍重されました。これと同じ製法で、ジャガイモが南米の高地で加工されていました。また、冬の寒さを凌ぐために、カナダ・トロントでは、隣り合ったビル同士が、地下部分で、お互いにドアを開放し、通路を確保し、一般通行人が凍てつく屋外を歩かなくてよいうに工夫されています。このようなことは、現地を知らないとわからない生活の工夫ですね。このようなことをアップしていただければ、同じような工夫をしている例を結びつけることができるのではと思っております。このプロジェクトは、世界各地、日本各地のどこでも対応できることではないでしょうか、集めた素材を公開し、その素材から考えられるように皆さんのお知恵を拝借し、どんな人々とも仲良く、手に手を取り合っている社会人(グローバル人材)を育成するための教材を作成していきません。皆さんの積極的発言をお待ちしております、世界各地どこからでも、参加お待ちしております。

☆水プロジェクト ☆生活の工夫プロジェクト ☆食品加工プロジェクト ☆在外教育施設の未来像
info1@zenkaiken.jp まで一報を!

シニア派遣希望者研修会のお知らせ

シニア派遣希望者研修会は、一度引退した方々が、世界各地に派遣され、活躍されている方と、活躍にはほぼ遠い方がいる現実を解消し、皆が活躍出来る場にしたいために、古き良き時代を忘れ、新しき厳しき現実を知り、あたらな決意が出来る場としていきます。

- 1, 参加対象者: 在外教育施設シニア派遣教員希望者(退職後希望者)
- 2, 日時 : 令和6年4月27、28(土、日)
- 3, 場所 : 千葉県千葉市(申し込み等はHPから)
- 4, 申込先(全海研事務局): info1@zenkaiken.jp まで

令和6年度・全国大会のお知らせ(予定)

日本の子どもたちは、基礎学力は世界のトップクラスであるが、発想力・表現力・批判的思考力・コミュニケーション能力等は世界各国の中で劣っているといわれています。この児童生徒を世界的視野に立った人間になり、世界的貢献が出来るためには、広い視野を持たせ、お互いを尊重できる人間に成長させる必要があります。また、どんな方々とも出会っても自分からコミュニケーションが取れる人々・すなわちグローバル化に対応した人々を生み出していくために全海研は全力を挙げて、誰でも使用できる教材作りに力を注ぎます。その船出の起点とする全海研・全国大会です。

「世界と子どもをひらき、つなぎ、つむぐ 教育をめざして」 ~ネットワークでつむぐ、明日の教育~

開催日時: 令和6年8月8、9日(木、金)

場所: 鳥取・米子コンベンションセンター (<https://asahikawa-tosei.jp/>)

後援: 外務省、文部科学省、(公財)海外子女教育振興財団、鳥取県教育委員会、JICA(後援申請予定)

講演:

特定課題分科会 グローバル社会の進展の中で国際理解教育を改めて問い直す ~共生・地球的視野・グローバル人材~

第1分科会 ①教育のグローバル化

第2分科会 ②国際理解教育の再構築

第3分科会 国③派遣体験のカリキュラム

第4分科会 ④日本人学校のインターナショナル子どもをひらく

トーキングテーブル 1, 初めての派遣への道(一般派遣希望者参加会合)

2, 再派遣・シニア派遣への道(日本語補習授業校教育の現実)

小話集原稿募集(応募原稿等は、genkouzkk@gmail.com 又は、info1@zenkaiken.jp)

日本各地で毎日奮闘している教師への良き資料として、日本各地・世界各地の出来事・伝統・風俗・習慣・食物加工・衣服への工夫・住居の工夫・精神的高揚感を高めるための行事・容器等への工夫・・・等、人々の日常的に工夫し、努力し、少しでも生活を円滑に、少しでも生活程度を高めようとしている事柄などを、日本国内の児童生徒に影響を与えるような「話し」ができる教員増加を目指しています。その教員(校長・教頭・教諭)への良き資料集として、一目で話しのレイアウトができるよう簡単に理解し、講話できる物を目指しています。(本紙11頁を参考にしてください)

<http://www.zenkaiken.jp>

年会費納入のお願い

HPにアクセスし、最新情報を集めてください。

E-mailを登録ください。

電子版会報を送付致します。
info1@zenkaiken.jpにて受付中。

本研究会は派遣教師全員が会員となっています。海外派遣中から、帰国後の働きを、皆さんで共有しながら、全国の児童・生徒の皆さんに開かれた、視野を広げ、思考を深めるための教育の実践活動を発表して、素晴らしい世界構築に頑張らしましょう。口座番号: 00110-9-26969 加入者名: 全国海外子女教育国際理解教育研究協議会、<http://www.zenkaiken.jp/httpd/html/Honbu/Furikomi.htm> 参考にして頂き送付方願います。

編集後記

世界的に自然環境の変化、人為的戦争状態の地域、事故等、混沌とした状況が生まれていますが、派遣教師は、澁刺とした夢と希望に溢れていませんか。そのすがすがしい気持を大切に、これからの日本を担う「児童・生徒」に素晴らしい教育をお願いしたいものです。子ども時代に海外で過ごした方々の、大人になってからの、世界での活躍は目を見張るものがあります。この巻頭言は、そのお一人の方からご意見をいただきました。ぜひぜひ夢・希望を与えていける派遣教師として未来の日本を牽引する人材育成に!

会報「ひまわり」第116号

●発行日 令和6年1月18日 ●発行人 滝 多賀雄 ●編集人 久富 雅仁

●発行: 全国国際理解教育研究協議会

〒134-0013 東京都江戸川区江戸川 5-14-7 TEL 03-5696-3358 FAX 03-3804-7432
URL: <http://www.zenkaiken.jp> E-mail: info1@zenkaiken.jp